

我が天は

谷田貝常夫

畏友竹本忠雄君の「宮本武蔵」講演を聞いて類推の及びしは、「二天」なる武蔵が唱へし雅號がもとなり。そも「二」なる語につきまどふは、二流、二股膏藥、ふたごころ、二次会、二号さん、などの一段さがりたるイメижならむ。宮本武蔵自身も実戦において大小を帯びてはをりたれど、実戦に用ゐしは木刀一本のみ。そこに敢へて「二天」を正式に用ゐたる真意は如何なる事情ならんか。

武蔵が絵を描きし事あるは話には聞き及べども、武者の余技ならむとほとんど関心をよせざりしを、ある時、京都東寺にてそが現物を眼にしたる時、一驚させられたり。何たる精神性の高さなるかな、凡俗の絵画の巧緻を越えたる表現なるかと。画題は単なる鳥の木にとまりたるものなれど、その細き幹の、枝もなきに等しきに、ひたすら天に向かひて伸びゆく形の一途さに、剣士の鋭さを見たり。余技にてはなし。ここに武蔵にとりての絵画の位置と高さ、納得せられたり。二天の一方が武道なるは万人周知のことなれど、絵画も今一方の天なること理解せられたり。武蔵の絵画の中には重要文化財になりたるもあり。

竹本講師、今回の講演の題名は「宮本武蔵 超越のものふ」と題せる自著の紹介を中心とせるものにて、この本、先にフランス語にて出版せられ、すでにパリにて定評を得たるものなる由。衰退の一途をたどれる「巴」を救はんには、宮本武蔵的武士道の行き方、よき参考とならむとの願ひによるところありたらむ。

今回の講演にては小生のおよそ知らざりし武蔵が絵画、数多く紹介せられたり。竹本講師の願ひは、そをもちて巴里ルーブルにての展覧會開催を實現したしとするものなり。

そが武蔵にからみて思ひあはせらるるは、与謝蕪村と渡辺華山なり。蕪村は絵画をもちて生業（なりはひ）となし、文芸たる発句は晩年近くになりて作りはじめたるものにて、押されて宗匠となりて活躍したり。こも二天を平行せりと言へむ。幕末に三河田原藩にて家老にまでなりし渡辺華山は、幼少より絵の上手にて、藩士や家老の役職をつとむる余暇にも絵を描きたり。殊にその人物像は厳しき姿にて、生前から評判とはなりたり。中にも「鷹見泉石像」は国宝に指定せられ、他にも重要文化財とされたるもあり。天は二物を與へず、なることわざあるも、ここにあげたる三者には通用せざることなり。天から二物はもちろん、一物をも與へられざりし己を嘆くばかりなり。

（令和三年五月二十一日受附）